１０・メルヤのしゅじん

とある年の春。十二時半ごろ。
場所は主人公の所属する騎士団本部の一室。
天気は晴れ。気温は二十二度程度。

主人公とメルヤは今、ガラテアに呼び出されてこの部屋へやってきたところだ。
主人公が扉を開くと、中ではガラテアが着席して待っている。
本部では、つい数十分ほど前まで、会議が行われていたらしい。
つまりガラテアは、その結果を伝えるべく、主人公達を呼んだのだ。

部屋は広く、ゆとりがある。
木の家具が中心の落ち着いたデザインの部屋で、これらは主に、ガラテアのセンスによるものである。

ＳＥ１　外の環境音
【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】
【建物の中から、外の環境音が聞こえる】
【0―5秒ほど流して『ガラテア』のセリフ】
【その後、音量が小さくなる】
【トラック終了まで流し続ける】

▲　ボイス加工あり
【2メートルほど離れた位置から聞こえる】
【少し低い位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
少し威圧感のある声で。
とても落ち着いた、冷静な様子で。
内心は非常に緊張し、また喜んでもいる。
自分と周囲の尽力もあり、主人公の処分が比較的軽いもので済んだので。
だが、上司として、姉として。この気持ちを素直に表現する訳にはいかない。
主人公が任務放棄した事、それが罰せられるべきものである事には変わりないからである。

なので、意識して『怖い上司であり、姉でもあるガラテア』として振る舞おうとしている】

ああ、来たか。

時間通りだな。

【少し威圧感のある声で、冷静に。

実は、これは褒めている。

ガラテアとしては『時間通りに来てえらいぞ。我が家の教育の賜物だな』という意味で言っている。

しかし、日頃の行いや主人公との関係性のせいで、なんだか棘のある言い方に聞こえてしまう。

『主人公は我が家の騎士としては劣等生だが、時間だけは守れるのだな』というような、嫌味っぽく聞こえてしまう】

そこは、我が家の人間らしいと言ったところか」

〈主人公〉

「はい……」

SE2　主人公の足音

【最初から途中まで流す】
【ＳＥ３と同時に流す】
【ＳＥ３が終わるタイミングで止まる】

ＳＥ３　メルヤの足音
【最初から最後まで流す】
【ＳＥ２と同時に流す】

主人公とメルヤ、ガラテアの座る机の近くまで歩いて行く。
これによって、ガラテアとの距離感は１メートルほどになる。

主人公、長姉の放つ威圧的な空気に少々ひるみつつも、しっかりと立ち、彼女をまっすぐに見つめて頷く。
それはこの日に至るまで、主人公が様々な試練を乗り越え、また、その傍らにはずっとメルヤがいてくれたからだろう。
任務に出た一か月と少し前と、今の主人公は大きく違う。
その間に起きた出来事は、胸を張れる事ばかりではなかった。
だが……それでも、自分なりに成長して戻ってきた事を、ガラテアに伝えたい。

主人公はそう思ってここにいる。

▲　ボイス加工あり

【1メートルほど離れた位置から聞こえる】

【少し低い位置から聞こえる】

〈ガラテア〉

「【メルヤに話しかけている。

厳しそうな雰囲気は残しつつも、主人公に対してよりも、かなり穏やかで丁寧な雰囲気になる。

ガラテアは亜人の少女達には非常に優しく、特にメルヤに対しては腰が低い。

ガラテアはメルヤの事を『主人公の恩人』であり、また『未来の義妹となるかも知れない女性』と捉えているので。

また、先ほどの主人公への言葉について、内心早速反省している。

『しまった、またやってしまった。私と来たらまた余計な事を』と思っている】

メルヤ殿。本日は君までお呼び立てして済まない。

手短に済ませるから、君も聞いて頂けるだろうか」

●左　30センチ

「【ガラテアに話しかけている。
少し緊張しつつ、落ち着いて、真剣に受け答えする。
メルヤは主人公の左側に並んで話している】
……とんでもありません。
勿論です。どのような話でもお伺いします」

メルヤもまた、ガラテアのプレッシャーには少々緊張しているようだ。
普段であれば手を握って支えたいところだが、今はそうはいかない。
これから主人公は、しかるべき処分を受ける事になるからだ。

▲　ボイス加工あり
【1メートルほど離れた位置から聞こえる】
【少し低い位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【メルヤに話しかけている。
少しホッとした様子で。
厳しそうな雰囲気は残しつつも、主人公に対してよりも、かなり穏やかで丁寧な雰囲気になる】

ありがとう。
では、単刀直入に。
【主人公に話しかけている。
また、少し威圧感のある声で。
とても落ち着いた、冷静な様子に戻る。
だが、内心は非常に緊張している。
ガラテアとしては『この処分がベストだ。皆喜ぶのではないか』と思っている。
だが、肝心の主人公が何と言うかはまだわからないので】
先ほどの会議で、お前の処分が決まった」

●左　３０センチ
「【※息づかいのみ※　で表現する。
驚きつつも、覚悟を決めたような様子で息をのむ。
どのような用件で呼び出されたかについては薄々理解していた。
だが、それでも非常に緊張するので】
……！」

主人公、内心非常にドキドキしながらも、深く頷いてガラテアの次の言葉を待つ。

それから、

わたしが騎士でいられなくなるのは、当然の事だ。
どんな処分でも、受け入れよう……。

そう思いながら、己のこぶしを強く握った。

▲ボイス加工あり
【1メートルほど離れた位置から聞こえる】
【少し低い位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【二人に話しかけている。
騎士団としての結論を、淡々と告げる。
『可能な限り、自分の感情を交えずに伝えよう』と思っているので。
少し威圧感のある声で。
とても落ち着いた、冷静な様子で】
『いかなる理由があっても、任務を放棄し、計画と大きく違う行動をとった者を、我が騎士団に置いておく事はできない。

貴殿の意向通り、本日付で退団処分とする』
これが騎士団の結論だ」

〈主人公〉
「……」

主人公、深く息を吸って、目を閉じ、ガラテアの言葉を静かに受け止める。

――うん。やっと処分してもらえてよかった。
希望通り、騎士としてのわたしの人生はこれで終わったみたいだ。
わたしは、人間として間違った事はしていない。
でも、それは組織に所属する人間として正しい行動ではなかった。
だから、騎士団を離れる。
それだけの事なんだ。
だから、胸を張って生きていこう。
これからめーちゃん達や家族に迷惑かけちゃうかもしれないと思うと、早速申し訳なくなってくるけど……。
これからの行動で、埋め合わせをして行こう。

そう思い、己を落ち着かせる。
『残念ではない』と言えば嘘になるが、納得はしている。
『こうなってしかるべきなのだ』と思っている。

●左　３０センチ
「【ガラテアに話しかけている。
落ち着いて返事をしているようで、内心かなり動揺している。
騎士団のルールとは言えど、騎士団の冷たい判断に対して『いかがなものか』と思っているので。
主人公は『当然の事だ』『自分としても退団するつもりである』と言っているが、メルヤとしては納得していないし、亜人の少女達一同としても抗議したので。
だから『まだ続きがあるはずだ』『抗議をするなら、最後まで話を聞いてからだ』と思いつつ、ガラテアの次の言葉を待つ事にする】
……然様（さよう）でございますか……」

だが、メルヤにとってはそうでないらしい。
心配してくれる事はとてもありがたく、申し訳ない。

しかし、もう決まった事なのだ。
だから主人公は、この後メルヤにかけるべき言葉を考えつつ、まずはガラテアに今の気持ちを伝えるため、ゆっくりと息を吐いた。

▲　ボイス加工あり
【1メートルほど離れた位置から聞こえる】
【少し低い位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【二人に話しかけている。
内心非常に緊張して。
本題は、むしろここからなので】
だ、が……」

〈主人公〉
「承知しました。処分には納得しております。
退団の意向を汲んで下さりありがとうございます。
今まで本当にお世話になりました。
では、これで……」

だが……。

▲　ボイス加工あり
【1メートルほど離れた位置から聞こえる】
【少し低い位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
これまで通り冷静に話そうとしているが、実際はかなり慌てている。
主人公が騎士団に何の未練もなく、もう去ろうとしているので。
『話はまだ終わりではない』と言いたい。
※コミカルな印象にならないようにお願いします※】
おい。話はまだ終わりじゃないぞ」

●左　30センチ
「【きょとんとして。
ガラテアが何を話そうとしているのか、見当もつかないので。
だが、内心少し安堵している。

『話はこれだけで終わらず、多少は前向きな話もあるはずだ』という点については納得しており、むしろ『当然だ』と思っているので】

え？」

〈主人公〉

「え……？」

話はまだ、終わりではなかったようだ。

ガラテアのその言葉はあまりにも意外で、主人公とメルヤは、思わず声を重ねる。

ガラテア、ここで椅子から立ち上がると、二人の近くまでやってくる。

SE4　ガラテアが椅子から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

SE5　ガラテアの足音

【最初から最後まで流す】

【4回繰り返して流す】

【だんだん近づいてくる】

ガラテア、立った状態で、少しだけ離れた位置から話し始める。
だけど主人公とメルヤには、これから彼女が何を言い出すのか、まるで見当もつかない。

▲　ボイス加工あり
【70センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【二人に話しかけている。
※咳払いをしてから※　話す。
内心とても緊張している。
これから話す事について、ガラテアとしては『とても良い話だ。この話を主人公に盛ってくることができて本当に良かった』と思っている。
だが、肝心の主人公が、なんと言うかはわからないので】
実は現在、少々困った事があってな」
〈主人公〉
「……？」

▲　ボイス加工あり
【７０センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【二人に話しかけている。
困惑したような、少し呆れたような様子で。
『納得が行く』が半分『少々理解しがたい』が半分という感じで。
姉としては納得できるが、騎士としては『軽い気持ちで希望してはいないだろうか』『考えが甘いのではないか』と思っているので。
『我々』とは騎士団の事】
これは、我々としても予想外なのだが。
このところ、入団を希望する者が妙に多い」

●左　３０センチ
「【※息づかい※　だけで表現する。
大きく息を吸ってから次のセリフを話すイメージで。
少し緊張している。
それは、まず、ガラテアの威圧感による緊張である。
また、ガラテアがこれから何を話そうとしているのかおおよそ想像がついたものの、ま

だ核心には至らないので。
ひとまず、質問しようとしている】
……。
【ガラテアに話しかけている。
少し緊張しつつ、質問をする。
実のところ、その件については承知している。
メルヤは現在、チハやダイアナなど、騎士を志すようになった亜人の少女達が複数いる事を把握している。
また、すでに彼女達から相談を受け、彼女達が騎士団へ入団の意向を伝えた事も知っているので。
だが、それが主人公の今後とどう関係があるのか、察しはついても確信には至らないので。
なお、この件については主人公にはまだ話していない。
『騎士団をやめる主人公に、チハやダイアナなどが騎士になりたがっている話をしても、複雑な思いをさせるだけなのではないか』と思っていたので。
なので、主人公の処分が決まるまでは、ひとまず秘密にしていた】
恐れ入ります、ガラテア様。
それは……その。どういった事なのでしょう？」

▲　ボイス加工あり
【７０センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【メルヤに話しかけている。
少し慌てて、申し訳なさそうに説明を始める。
『メルヤが要領を得ていないようだ』と気づき、己の説明不足を自覚したので。
『しまった。メルヤは別の土地から来ていて、この街はもちろん、騎士団の仕組みも何も知らないのだ』と思い、この街の騎士の制度について説明していく】
ああ、申し訳ない。
メルヤ殿はこの街に来たばかりだったな。
我が街では、騎士を志す者に対し、広く門戸（もんこ）を開いている。
簡単に言えば、騎士団が運営する、独自の騎士学校のようなものがあるんだ。
専門の訓練を受けていない者でも、そこで一定期間学び。
試験に合格する事で、騎士になれる仕組みになっているという訳だ。
【少し困ったような、呆れたような声で。
言葉で仕組みを説明するのは簡単だが、このルートで騎士になれるものは決して多くはないので。

騎士団に関する仕事に就く事はできても、騎士そのものになる事は難しいので。
ガラテアは最近の希望者に、これを何度も何度も、根気よく、厳しく、時には脅すような口調で説明している。
だが、誰一人まったく折れず『それでも入団したいです！』『私は必ず騎士になります！』と言ってきかないので】
……まあ、言う程簡単なものではないがな。
【ここから、二人に話しかけている。
※小さく息を吸ってから※　話す。
ガラテアは、希望者達の向こう見ずな考えに少々呆れている。
だが、それ以上にその想いや、強い勢いを嬉しく思っている。
それは、彼女達の志望動機がとても尊く、個人的には支持せざるを得ないものなので】
しかし。
どれだけ『容易なものではない。生半可な覚悟では潰されるだけだ』と言っても、ちっとも希望者が減らん。
【しれっと言う。
ガラテアは『亜人の娘達』『ここ最近のニュースを聞きつけた若い娘達』の相談に散々乗っている。
メルヤもまた、それを知っている。

だが、それを主人公に知られるのは恥ずかしい。
なので『聞く所によると、割合としてはこのようになっているぞ』と、まるで他人事のような言い方をする】
割合としては亜人の娘達。
次いで、ここ最近のニュースを聞きつけた若い娘が多いな。
【入団希望者達のコメントを、ここから二つ述べていく。
『たとえ任務に背いても、人を助け、人に尽くす騎士』とはもちろん主人公の事である。
ガラテアはこれらのコメントを、直接聞き、内心嬉しく思っていた。
だが、それを主人公に知られるのは恥ずかしい。
なので『聞く所によると、こんな事を言っているらしいぞ』などという感じの、まるで他人事のような言い方をする】
『たとえ任務に背いても、人を助け、人に尽くす騎士は格好いい』
【『あれば』をわかりやすく強調して言う。
『逆に言えば、そのような騎士でないのなら、自分の目指す騎士とはいえない。なりたくはない』という彼女達の意向を強調している】
『そのような騎士であ・れ・ば。自分もぜひなりたい』のだそうだ」

〈主人公〉

「……！」

主人公、驚きに息をのみ、言葉を失う。

鈍くて自分に自信のない主人公でも、彼女達が誰を指して言っているのかはだけはわかる。

だから、

……わたしの行動に気持ちを動かされて、入団志望をした人がいたんだ。

しかも、それって、もしかして……！

と思いを巡らせ、つい、目に涙が滲み始めてしまう。

▲　ボイス加工あり

【７０センチほど離れた位置から聞こえる】

〈ガラテア〉

「【主人公に話しかけている。

しれっと、あっさりと言う。

『退団後、今度は騎士学校の教師となって、騎士団入団志願者達に指導する気はないか？』

という意味で言っている。
ガラテアは先ほどの会議でこれを認めさせるため、最大限力を尽くした。
他の参加者に『身内の事だからと言って、随分必死だな』『そんなにお家を守りたいのか』『長女様は大変だね』と小馬鹿にされても、客観的な視点から、主人公を教師として迎えるメリットを主張し、どうにか通した。
だが、それを二人に知られるのは恥ずかしいので】
という事でどうだ。
教える気はないか？　志願者達に」

〈主人公〉
「でも、わたしは騎士を……」

主人公、なんとか言葉を紡ごうとするも、声が震えてしまって、うまく喋れない。
これでは『嬉しい』と思っている事が、『自分をそんな風に思ってくれている人がいたんだ』と思っている事がバレバレだ。
それに、それだけではない。
この提案をするために、ガラテアはきっと――……。

▲　ボイス加工あり
【７０センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
しれっと、あっさりと言う。
しかし、内心では非常に緊張している。
『自分がここまで必死に話を通したのに、主人公があっさり断ってしまったらどうしよう』と思っている。
『もちろん、どうしたいかは主人公の自由だ』とわかっているからこそ、さらに緊張してしまう】
そうだ。騎士はやめてもらうぞ。
それはお前自身の希望でもあるからな。叶えるさ。
【主人公が感じている疑問について答える。
主人公も知っている、騎士学校の年配の教師について述べる。
これによって、理屈の上では『騎士ではなくなっても、騎士団で働く事はできる』という事を説明していく】
だが、お前も知る通り、退役後に騎士学校で教えるようになった、ペルトマー先生のような方もいる。

つまり、騎士団には『厳密にはすでに騎士ではない人間』もいる訳だ。
お前にも資格がある」

〈主人公〉
「……そう、ですが……っ」

だが、よいのだろうか。このような自分がもう一度騎士団に関わって。
それは多大な迷惑をかける事に繋がったり、多数の批判を招いたりする事にならないだろうか。
不安視する主人公に、ガラテアはさらに続ける。
彼女自身の、想いを述べてくれる。

▲　ボイス加工あり
【70センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
しれっと。
ガラテアは、主人公にこの選択肢を与えるために散々奔走した。

なのに『まぁ、手が足りなくて困っているから、資格のある主人公が働きたいというのであれば、雇ってやるのもまぁよい』と言っているかのようなスタンスをとる。
『猫の手も』は『猫の手も借りたい』の略】
我々としても、正直な所手が足りん。
『猫の手も』とは言わんが。
採用に足る実力があって、暇している奴がいれば、ぜひ来てもらいたいと思っている。
【一段階優しいトーンになって。
ガラテアは、主人公に厳しく接し、そのせいで苦しめた以上、自分の手柄を主張する気は全くない。
だが、ミーシャは違うので。
ミーシャもガラテア同様主人公のために奔走していたが、やはりそれを主人公には隠そうとしている。
しかし、ガラテアは、ミーシャの事については、主人公に知っていて欲しいと考えているので】
……ミーシャも、お前は教師に向いていると言っていたしな」

〈主人公〉
「……！」

『何気に教えんのうまいよね。あんた』
『あんただったら、騎士やめたって、向いてる仕事沢山あると思う』

主人公の脳裏に、先日ミーシャからかけられた言葉が蘇る。
ミーシャもまた主人公の将来を案じ、ガラテアに掛け合っていてくれたのだ。
今目の前にいるこの人はきっと認めないだろうが、ガラテアだって絶対にそうだ。
ルミナに関しては、言うまでもない。
自分は家族に深く愛されていて、とても大切にされている。
それを実感して、主人公は泣きたくなる。
先日ミーシャと話した時は泣かないと決めていたくせに、もう泣きそうになっている。

▲　ボイス加工あり
【70センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
『全く困った奴だよ。あそこまでされたら、我々騎士団も議題に上げざるを得ないだろう』という感じで。

自分もミーシャのような努力をしたくせに、そのようなそぶりは見せない】
ああ。随分熱く説明されたよ。
お前を支持する者の署名まで集めてきてな。
【『ふーん、すごいじゃないか』という感じで。
署名の数や、署名に添えられたコメントについて述べる。
内心、とても喜んでいるが、それを表には出さない。
自分もそのすべてに目を通し、コメントに賛同したり、主人公への熱い支持に事に喜んだり、主人公の人気を実感したりしたのに『私はよく知らないが、お前、意外と人気者らしいぞ。よかったな』程度の言い方をする】
随分慕われてるじゃないか。
鈍いお前はピンと来とらんのだろうが、一部じゃすっかりヒーロー扱いだぞ。
【冷静に、部下に新しい仕事を任せるようなトーンで。
内心非常に喜んでいる。
だがそれを見せず『私個人の感情ではなく、客観的な面から冷静に判断した』という感じで言う】
これなら、任せても問題ない。
そう判断しこの結論に至った」

〈主人公〉
「わたしが、先生に……」

▲　ボイス加工あり
【70センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
冷静に、部下に新しい仕事を任せるようなトーンで。
内心非常に喜んでいる。
だがそれを見せず『私個人の感情ではなく、客観的な面から冷静に判断した』という感じで言う。
『彼女達』とは亜人の少女達や、主人公を慕っている入団希望者達の事。
『彼女達』を補足したのが『お前を支持する者達』。
『自分のした事』とは『任務に背いてでも、亜人の少女達を救った事』。
『これからの生き方で証明する』というのは『よい教師となって自分を慕うものを導き、かつ、自分で助けた亜人の少女達の人生に責任を持つ』という意味】
そうだ。
今度は師として彼女達を。

お前を支持する者達を導くんだ。
自分のした事は間違っていないと言うのなら、これからの生き方で証明するといい。
【一呼吸おいてから。
あくまで仕事の話として、部下に新しい仕事を打診するようなトーンで。
『もちろん、最終決定権は主人公自身にある』という感じで。
内心非常に緊張しているが、それは表に出さない。
自分の感情が、主人公の選択を左右してはいけないので】
……まぁ、すぐにとは言わん。急に言われても困るだろうしな。
どの道、騎士学校の新学期までは時間がある。
考えてみてくれ」

〈主人公〉
「はい……！」

▲　ボイス加工あり
【70センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。

あっさりと。
『では、この話は終わりだ』という感じで。
内心非常に緊張し『主人公はどのような決断を下してくれるのだろう』とドキドキしているが、それは表に出さない。
自分の感情が、主人公の選択を左右してはいけないので】
ふむ。よろしい。
【ここからメルヤに話しかけている。
さらりと話す相手を変える。
丁寧で落ち着いた口調で】
では、メルヤ殿」

●左　30センチ
「【真面目で落ち着いたトーンで。
内心非常にドキドキしている】
はい」

SE6　ガラテアの足音2
【最初から最後まで流す】

【ＳＥ５と同じ音】
【５回繰り返して流す】
【だんだん近づいてくる】

ガラテア、メルヤが返事をするとともに、ふと、こちらへ近づく。
そして、メルヤのすぐ目の前まで来たところで……。
メルヤに向かって、深々と頭を下げた。

▲　ボイス加工あり
【５０センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【メルヤに話しかけている。
丁寧で落ち着いた、真面目なトーンで】
この度は本当に世話になった。こいつの姉として、心から礼を言う」

ＳＥ７　ガラテアがメルヤに頭を下げる音
【最初から最後まで流す】

●左　３０センチ
「【※息づかいのみ※　で表現する。
『信じられない事が起きた』という感じで】
……！
【驚き慌てて。
『信じられない』『ガラテアが、なぜこんな事をしているのかわからない』という感じで。
これはメルヤにとって、あまりにも予想外の出来事だったので】
ガラテア様⁉
ガラテア様。どうか頭を上げて下さいませ」

▲　ボイス加工あり
【５０センチほど離れた位置から聞こえる】
【頭を下げた事で、少しこもって聞こえる】
〈ガラテア〉
「【メルヤに話しかけている。
頭を下げたまま話している。
丁寧で落ち着いた、真面目なトーンで。
『頭を下げている事に関しては全く気にしないでくれ。当然の事なのだから』という感

じで】
いや、このまま。
【丁寧で落ち着いた、真面目なトーンで。
『メルヤに主人公を任せたい』という思いを、真剣に述べていく。
『こいつ』とは主人公の事】
メルヤ殿。こんな妹だが、どうかよろしく頼む。
こいつには君のような、聡明な女性が必要だ。
【主人公に関する所感を述べる。
呆れつつも、愛情のある声で。
ガラテアはこれまで主人公に対して『気が弱く、姉達の後ろをついて行くだけの存在』と思っているところがあった。
しかし今回の事件で、ガラテアの主人公に対する見方は大きく変わった。
なので主に、今回の事件で感じた所感を述べている】
こいつと来たら、気が弱いのかと思えば、妙に頑固で危なっかしい。
もっと楽な道を選べばよいものを、肝心な所でいつも困難な方法を選ぶ」

SE8　ガラテアが顔を上げる音
【最初から最後まで流す】

ガラテア、頭を上げると、まっすぐにメルヤを見つめ、真剣なトーンで言う。

▲　ボイス加工あり
【５０センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【丁寧で落ち着いた、真面目なトーンで。
主人公の家族として、真摯な想いをメルヤに伝える】
苦労かけるだろうが……これからは私達もついている。
どうか私達と一緒に、こいつを支えてくれないだろうか」

メルヤもまた……それに真摯に答える。

●左　３０センチ
「【とても驚き、感激して。
だが、力強く言う。
少し早口気味に。
『感激のあまり、上手く言葉が出てこない』という感じで。

メルヤにしては語彙が乏しく、また、上手くリアクションができていない感じで。
それほど驚きで、信じられないほど嬉しい事だったので】
……はい。もちろんで、ございます……！
私（わたくし）の全てを以（もっ）て、ご主人様をお守りいたします……！」

▲　ボイス加工あり
【５０センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【メルヤに話しかけている。
穏やかに優しく、丁寧に。
実感を込めて。
これまで本心を隠すような態度ばかりとっていたが、ここでは素直な感情を見せる】
……ありがとう。
君がいてくれて、本当に良かった」

こうしてガラテアは言葉を結び、メルヤにもう一礼する。
そして、普段の口調に戻って、こう言う。
それはそっけないようで、姉らしい照れ隠しだと、主人公は思った。

▲　ボイス加工あり
【７０センチほど離れた位置から聞こえる】
〈ガラテア〉
「【※大きく息を吸ってから※　話す。
『はい、おしまい』という感じで、余韻なく、さらっと話を切り上げる。
内心非常に照れている。
なので、わざとそっけないようなふりをしている】
では、話は終わりだ。
一時から、また次の会議があるんでな。
【二人に話しかけている。
穏やかに優しく。
では、またな。
今後の君達に期待している」

●左　３０センチ
「【とても感激した様子で。
だが、力強く言う。

そうする事で、ガラテアに少しでも信頼できる人間である事を示したいので】
……はい……！
お時間、ありがとうございました……！」

一度フェードアウトする。

約十分後。
主人公とメルヤ、騎士団本部の外を歩いている。
二人ともまだ、先ほどの出来事への驚きと感動の余韻が抜けきっていない。

SE9　外の環境音2
【最初から最後まで流す】
【SE1と同じ音で、開始位置を変えて流す】
【繰り返して流す】
【0―5秒ほど流して『メルヤ』のセリフ】
【その後、音量が小さくなる】
【トラック終了まで流し続ける】

SE10　主人公の足音2
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【SE2と同じ音】
【SE11と同時に流す】
【小さめの音量で流す】
【▲1　で一度ストップする】
【▲1　でSE11と一緒に止まる】
【▲2　で再開する】
【▲2　でSE11と一緒に再開する】
【▲3　で再びストップする】
【▲3　でSE10と一緒に止まる】
【▲4で再開する】
【▲4　でSE11と一緒に再開する】
【その後、SE11と一緒にフェードアウトする】

SE11　メルヤの足音2
【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】
【ＳＥ３と同じ音】
【ＳＥ１０と同時に流す】
【小さめの音量で流す】
【▲１　で一度ストップする】
【▲１　でＳＥ１０と一緒に止まる】
【▲２　で再開する】
【▲２　でＳＥ１０と一緒に再開する】
【▲３　で再びストップする】
【▲３　でＳＥ１０と一緒に止まる】
【▲４で再開する】
【▲４　でＳＥ１０と一緒に再開する】
【その後、ＳＥ１０と一緒にフェードアウトする】

●正面　３０センチ
「【緊張が解けてホッとした様子で。
ガラテアと話すのは、やはり緊張するので】
ふう……。

やはり、ガラテア様とお話しするのは、少々緊張致しますわね……。
【穏やかに主人公をねぎらう。
おそらく自分以上に、主人公は疲れたと思うので】
ご主人様。お疲れ様でございました。
どこかでお茶でも飲んで、休みましょうか」

〈主人公〉
「うん、ありがとう……。
なんか……」

●正面　３０センチ
「【きょとんとして。
主人公が先ほどからぼんやりしており、何を考えているのか、いまひとつわからないので】
はい？」

主人公、まとまらないなりに、今の想いをぽつぽつと述べていく。
この短い間に、あまりにもいろいろな事があった。

まだ自分の気持ちを整理する事も、新たな決断を下す事もできないが……。
それでも今の一番新しい気持ちを、メルヤに知ってもらいたい。
そう思い、話し続ける。

〈主人公〉
「ガラテアお姉さまがめーちゃんに言った事……すごい……嬉しかったし……」

●正面　３０センチ
「【嬉しそうに相槌を打つ。
落ち着こうとはしているものの、少し興奮気味に。
ガラテアの事は、正直な所まだ少し怖い。
だが、彼女が認めてくれた事は非常に嬉しく、今後距離を縮められるかもしれないと思うと、とても希望が持てるので】
はい。
私（わたくし）も驚きましたが、それ以上に、大変嬉しゅうございました。
【落ち着きを大分取り戻して。
たった今まで『嬉しくて少しはしゃいでしまいそうだ』と思っていた。
だが、これからの事を思うと身を引き締めていかなくてはならないので】

本当に、この身に余る光栄でございます。
ガラテア様の御期待に沿う為にも、より一層頑張りますわね」

〈主人公〉
「それから……」

●正面　３０センチ
「【優しく続きを促す。
きょとんとしつつも】
ん？」

〈主人公〉
「ガラテアお姉さまが、あんな風にわたしの事を考えてくれていて。
わたしのために頭まで下げて下さった事に、本当に驚いた。
本当に本当に、すごく嬉しかった。
だけど、わたしに取って、めーちゃんが評価されるのは当たり前だから。
なんかもっと、他のところで混乱してるっていうか……」

●正面　３０センチ
「【優しく続きを促す。
だが、主人公が何を言おうとしているのかよくわからず、少々混乱もしている】
ええと……それは……？」

……話しているうちに、少々要領を得なくなってきた。
メルヤも混乱しているようではないか。
主人公、これを理解しつつ、それでもなお、思いつくままに話していく。

〈主人公〉
「えっと。えーっとね。
わたしが驚いてるのは、こんなに、評価してもらってた事……。
わたし、退団処分どころか、勘当されるだろうって思ってたから……。
亜人のみんなやミーシャお姉さま、ルミナお姉さまが、ここまでしてくれて。
それだけで本当にありがたいのに。
なんか、わ、わたしに、支持してくれる人？　までできてたなんて……。
ちょっと、信じ、られなくて。
めーちゃん、本当にありがとう。

こんな風になれたのは、みんながわたしを助けようとしてくれたからだよね」

●正面　３０センチ

「【少し食い気味に、主人公をたしなめる。
主人公の主張には、少々納得できないので。
この期に及んで主人公が『これは自分の実力ではなく、支えてくれたメルヤ達のお陰』
などと考えているようなので】
とんでもありませんわ」

〈主人公〉
「えっ！」

だが、この発言がメルヤに火をつけたらしい。
メルヤ、主人公の言葉を聞くなり、突如人が変わったように一気に話し始める。

●正面　３０センチ

「【※マークまで、少し熱っぽく主張する。
そうする事で、少しでも主人公に自信を持ってほしいので。

また、自分の想いを明確に伝えたいので】
私（わたくし）としましては、今回の処遇は、当然のものだと思っております。
貴方様が私（わたくし）達のためにして下さった事は、支持されて然るべきです」※

〈主人公〉
「あっあっあっ……」

主人公も、これにはたじたじだ。
メルヤの勢いを止める事など到底できず、相槌もまともに打てないまま目を白黒させるばかりだ。

●正面　３０センチ
「【※マークまで、少し熱っぽく主張する。
そうする事で、少しでも主人公に自信を持ってほしいので。
また、自分の想いを明確に伝えたいので】
例え私（わたくし）が無関係の一般市民であったとしても、私（わたくし）は、同じように考えます。
どうか、もっとご自分に自信を持って下さいませ。

【しかし、ここで勢い余る。
『ご主人様が素晴らしい方であるからこそ、私（わたくし）達は、ご主人様の選択を認めて頂けるよう、奔走したのです』という、本来伝えるつもりではなかった事まで口走りかける】
ご主人様が素晴らしい方であるからこそ、私（わたくし）達は……。　※
【少し慌てて。
伝えるつもりではなった事を口走りかけ、訂正しようにもすでに遅いので】
……あ」

▲1　ここで、SE10と11が一度ストップする。

ここでとうとう、会話が止まる。
二人の間に涼やかな風が吹き、それがますます、熱くなり、今、ますます赤らんでいるメルヤの顔を際立たせる。

〈主人公〉
「あの……。
ガラテアお姉様、さっきミーシャお姉さま達が掛け合ってくれたって、言ってたけど。

それって、もしかして、めーちゃんも……？
めーちゃんも署名活動とかに、協力してくれてたの？」

●正面　３０センチ
「【困ったようにもごもごと。
できる事なら、これは隠しておきたかったので】
ええと……それは……」

主人公『そうなんだよね？』ともう一度尋ねようとする。
だが、そうする前に、メルヤが先に口を開き、認めた。
そして再び、彼女は一気にまくしたてる。

●正面　３０センチ
「【※息づかいのみで※　表現する。
意を決する感じで】
……っ。
【かわいく怒って。
『そんなの当たり前でしょう』という感じで。

当初はこの件を黙っているつもりだったが、主人公があまりにも自己評価が低すぎて、さすがにムッとしてきたので。
これを機に、主人公がいかに周囲から好かれ、慕われているかをしっかり伝えておきたいので】
勿論、騎士団とガラテア様に働きかけたに決まっておりますわ。
貴方様がこの街に戻られて、処分が決定するまでの一週間。
ミーシャ様も、ルミナ様も、貴方様に救われた私（わたくし）達全員も。
貴方様の処分を軽くするために、一丸となって活動致しました」

〈主人公〉
「……！」

●正面　３０センチ
「【かわいく怒って。
『そんなの当たり前でしょう』という感じで。
しかし、段々熱が入ってきて、ぷんぷんとかわいく怒る中に、真剣な想いと主張があふれてくる。
ここが外である事も忘れて、主人公への想いを熱弁し始める】

だって、そんなの、当たり前じゃありませんか。
私（わたくし）達に未来を下さったのは、ご主人様です。
なのに私（わたくし）達は、ご主人様が騎士団に処分されるのを、ただ見ているだけなんて。
そんなの、おかしいではありませんか。
よいですか？　貴方様は、評価されるべき、幸せになるべき方なのです。
貴方様が、あの日、私（わたくし）達を救って下さったように。
今度は私（わたくし）達が……！
貴方様を幸せにする番だと、思っておりますから……！」

〈主人公〉
「う……うん……❤」

これによって主人公は、今度は感動で何も言えなくなってしまう。
自分の事でここまで真剣になってくれる女性と自分は出会う事ができ、恋人になる事までできた。
それを思うと、嬉しくて、幸せで、ありがたくて。
この先の人生、この人のために、何でもできる気がしてくる。

●正面　３０センチ

「【かわいく怒りながら、断言する。
普段のメルヤなら途中で我に返って照れてしまうところを、そのまま最後まで言い切る。
その位、メルヤは今熱くなっている。
大好きな主人公の事なので】
そうです。ご主人様は、それだけの価値がある方なのです。
大切にされるべき、愛されるべき方なのです。
もう二度とご自分を粗末にされるような事、させませんからねっ……！
【かわいく怒りながら、強く念を押す】
ご理解頂けましたかっ？」

〈主人公〉
「はいっ……！」

だから主人公は大きな声で返事をすると、ビシッと背筋を伸ばす。
それを見て、メルヤは満足げにしている。

●正面　３０センチ
「【かわいく怒りながら、大きく頷く。
主人公が、ようやく『ご理解いただけた』ようなので】
ふむ。
なら、よいのです」

▲２　ここで、ＳＥ１０と１１が再開する。

その姿が可愛くて……主人公の心の中には。また別の欲望がふつふつと湧いてきてしまうのだった。

●正面　３０センチ
「【上機嫌になって、話題を変える。
『それではこのお話は終わりです』という感じで、さらりと機嫌がよくなる】
では、喫茶店にでも入りましょうか。
最近、早速病院で軽作業をするようになりまして、報酬を頂けるようになったのです。
【『ですから、本日は私（わたくし）がごちそういたしますね』と言おうとして、途切れる。
主人公がそろりそろりと手を上げて、何やら言いたい事があるらしいので】

ですから、本日は私（わたくし）が……」

〈主人公〉
「あの。めーちゃん。
どうしよう……」

●正面　３０センチ
「【きょとんとして。
主人公がこれから何を言おうとしているのか、見当がつかないので】
はい？」

〈主人公〉
「どうしよう……今、すっごいめーちゃんのしっぽ舐めたい……❤」

主人公、照れつつも、欲望を素直に口にする。
本当にすっかり変わったものである。
昔ならこんな事、とても言い出せなかった。
今だって、基本的には言えない。

だけど……メルヤになら。メルヤにならどんな事でも打ち明けられると、幸せな信頼と確信があるのだ。

●正面　３０センチ

「【驚きっつ、まんざらでもなさそうに。
メルヤにとって、しっぽを愛してもらうのはやはり特別な事なので。
自分の事を『単純すぎる』と思いっつも、しっぽがらみのえっちな話題を出されると、途端に嬉しくなって、照れてしまう】
ええっ……？
も、もぉっ……❤
ご主人様ったら、こんな往来で、何をおっしゃいますの……！
『嬉しくて、しっぽを舐めたくなった』なんて。
全く、困った方ですわ……。
【ぼそっと。
まんざらでもなさそうに。
それどころか『ぜひ、家に戻ったら、舐めて欲しい』と言っているような感じで】
嬉しい、ですけれど……❤」

〈主人公〉
「えへへへ……」

と、二人が往来で、ちょっとただならぬ雰囲気になっていると。

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ダイアナ〉
「【大きな声で、ぎゃんぎゃん泣いている。
『普段とても大人しい子が、ついに我慢の限界に達し、大声で泣いている』というイメージ】
うえええええーん！
できないよぉー！」

やや遠くから、聞き覚えのある声が聞こえてきた。
それはメルヤたちの仲間の中でも年少の『ダイアナ』のものである。

▲3　ここで、SE10と11が再びストップする。

〈主人公〉
「あ……！
あそこにいるのって……！」

●正面　３０センチ
「【少し驚いて。
ダイアナの泣く声に気づいて、声のした方向を見て。
するとそこにはダイアナだけでなく、ルミナ、ミーシャ、チハもいたので】
あら？
あちらにいらっしゃるのは……」

これによって二人は、声が聞こえてきた方を見やる。
するとやはり……他の仲間と家族もまた、すぐそばにいるようだ。

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ルミナ〉

「【ダイアナに話しかけている。
おっとりしつつも、少し慌てて、困った様子で。
実はルミナは、今回の件で暴走した罰として、当分任務から離れる事になった。
その間は、騎士学校で先生として教える事になったのである。
という事で、ルミナは今、今後の勉強も兼ねて、騎士志望のダイアナに剣の扱い方を説明した。
だが、自分なりに丁寧に説明したつもりがダイアナには全く伝わっていなかった上、彼女が泣き出したので困っている】
あ、あらぁ？
どうしてかしらぁ……？
【優しい声でありつつも、少し困った様子で。
ルミナはダイアナに最適な説明をしたつもりであり、意地悪するつもりはまったくないので。
自分の説明の仕方が抽象的過ぎて、そのせいでダイアナが困っている事には気づいていない。
ルミナは剣士としては天才型すぎて、また人間としてはマイペースすぎて、現状、とことん教師に向いていないので】
簡単、簡単よ？

こんな風にぃ。
【なので、また『ふわ〜っ』『ぽよ〜っ』などという、抽象的な説明をしてしまう】
ふわ〜っ。ぽよ〜っ。って振るの！」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ダイアナ〉
「【ルミナに話しかけている。
すっかり混乱し、ぐずり始めている。
ルミナの教え方が、あまりにも抽象的で、理解しづらいので。
ダイアナは亜人の少女達の中でも最年少だが、非常におとなしい性格で、我慢強い。
そのため、イザベラの屋敷から逃亡する際も、ほとんど手がかからず、主人公達の間でも、とても良い子として知られている。
そんなダイアナは、主人公に憧れてこの度騎士を志す事になった。
これを聞いたチハやガラテアは、驚きつつも承認。
正式に騎士団の訓練が始まるまでは、周りに教わりながら剣の練習をする事になった。
今日は、その最初の一歩だったのである。
だが、最初の教師役があろう事かルミナだったせいで、かつてないほど混乱し、とうと

う泣き出してしまった】
わかんないわかんないぃ。わかんないよ～！」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈チハ〉
「【ルミナに話しかけている。
申し訳なさそうに。ダイアナの保護者的存在として頼み込む。
しかし内心では『この教え方では、ダイアナが理解できないのも仕方ないかもな』と思っている。
チハはルミナの事を、主人公の姉としても、騎士団最強の剣士としても強い関心があり、逃亡時から会うのを非常に楽しみにしていた。
しかし、実際に会ってみると、確かに武人としての圧倒的オーラや才覚は感じるのだが、指導に関してはこの通りで、少々困っている。
『騎士団最強の戦士だが、天才型すぎて、周りはついてこれない』『なので、先生役はほぼ未経験』と聞いてから、少々嫌な予感はしていた。
だが、想像以上にルミナは教えるのが苦手そうなので『これは、自分が間に入ってサポートするほかない』と思い始めている。

『すみません』が『さーせん』。
『もう少し』が『もうちょい』になる】
……さーせんルミ姉。
こいつ、未経験者なんで。
もうちょい、噛み砕いて教えていただけますと……」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ルミナ〉
「【チハに話しかけている。
おっとりしつつも、少し慌てて、困った様子で。
ルミナは今、自分なりに、最大限噛み砕いて説明した。
しかし、ダイアナどころか、チハにさえ全く伝わっていないようなので。
相変わらず、自分の説明の何が悪いのかはわからない。
だが『この説明では相手は理解できないようだ』という事はわかり、少し焦っている】
えっ。えっ。あれぇ～？
ちーちゃんから見ても、わかりづらかった、かしらぁ……？」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ミーシャ〉
「【ルミナに話しかけている。
明るく優しく笑って。
『大丈夫、これから教え方の練習をして行けば直せる』という感じで。
だが本心では『これじゃあ伝わりっこない……！　ルミナ姉さん、予想以上に指導適正低め……。先が思いやられるぞ～……』と少々焦っている】
ははっ。初心者向けの指導ではなかったかもねぇ～」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ダイアナ〉
「【静かにぐすぐす泣いている。
『元々は大人しい性格で、泣く時も静かなのだな』とわかるイメージで】
うううう……。
ぐすっ。ぐすっ。ぐすっ……」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ルミナ〉
「【ダイアナに話しかけている。
おっとりしつつも、少し慌てて、困った様子で。
ルミナには全く悪気はなく、手を抜いたつもりもない。
だが『現状、自分の説明はよくないようだ。もしかすると、自分は先生には不向きなのではないか』とは思い始めているので】
あぁ～。ごめんねぇダイアナちゃん。
【ひとりごとであり、また、ミーシャにたずねている。
基本的に他者の評価を一切気にせず生きてきたルミナでも、さすがに不安になってきたので。
『お姉ちゃん』とは自分の事】
お姉ちゃん、こんなんで先生なんてできるのかしらぁ～……」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ミーシャ〉

「【ルミナに話しかけている。
少々苦笑いしつつ、それでもルミナを明るく励ます。
『ガラテア姉さんがルミナ姉さんに『当面は任務から離れ、先生役をやれ』って言ったのは、おそらく部下ほっぽり出して色々してたルミナ姉さんへの、懲罰の側面があるんだろうなぁ……。これを機に、もっと目下を思いやれって事なんだろうなぁ』と思っている。
ただ、『ルミナが指導者としても優れた存在になり、自分と同レベル以上の騎士を輩出できるようになれば、確かにそれはすさまじい戦力増強になるだろう』とも思っている。なので、こちらをアピールする方針で励ます】
ま～あ、ルミナ姉さんがすごい先生になって、ルミナ姉さん級の騎士輩出しまくったら。
後々（のちのち）、すんごい事になるだろうし。
ガラテア姉さんもそれを期待してるんだよ。
だから頑張ろ～？」

〈チハ〉
「【ルミナに話しかけている。
慌ててミーシャに続く。
ルミナが想像以上に落ち込んでいるので。
『ここは何とか自分とミーシャがルミナの気分を盛り上げて、先生としてのモチベーシ

ョンを上げてもらわなくては』と思っている。
だが、嘘を言っているわけではない。
主人公からルミナについて聞いた時から『ぜひ、ルミナに剣を教わりたい。そして、自分も主人公のように立派な騎士になりたい』と思っていたのは事実なので。また、今もその気持ちは変わっていないので。
『ルミ姉』とはルミナの事。
『こいつ』とはダイアナの事。
『決めてます』が『決めてんす』。
『もう一回』が『もっかい』。
『教えてあげて下さい』が『教えたって下さい』になる】
そっすよ！
あたしも、座学は大将、剣技はルミ姉（ねえ）から教わるって、もう決めてんすから！
その一歩として、もっかいこいつに教えたって下さい！」

〈ルミナ〉
「【チハに話しかけている。
おっとりしつつも、少し泣きそうな声で。
さすがのルミナでも、ダイアナに泣かれたのはかなりショックだったので】

ほんとぉ〜……？」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈チハ〉
「【ルミナに話しかけている。
食い気味な位、強く肯定する。
ルミナにぜひ自信を取り戻してほしいので】
ほんとっす！
【ダイアナに話しかけている。
優しく、明るく前向きにダイアナを諭す。
『少し言葉は乱暴だが、優しくて、年下の世話に慣れているお姉ちゃん』という感じで】
な？　できるよな？　ダイアナ」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ダイアナ〉
「【概ね泣き止んで、大きく頷く。

本来の、真面目で我慢強い人物に戻って行く。
『騎士様』とは主人公の事】
うううう……。
うん……騎士様、みたいな騎士。
なりたいから……頑張るっ……」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈チハ〉
「【ダイアナに話しかけている。
優しく、明るく前向きにダイアナを諭す。
『少し言葉は乱暴だが、優しくて、年下の世話に慣れているお姉ちゃん』という感じで】
おーし、いいぞおその調子。
ダイアナなら、ぜってー大将みたいな立派な騎士になれっからな。
【ここで主人公とメルヤの存在に気づく。
明るく嬉しそうに】
……お！　噂をすれば！
【主人公とメルヤに話しかけている。

『ここだよ』という感じで、明るく嬉しそうに二人を呼ぶ】
お～い！　大将～！　メル姉～！」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ルミナ〉
「【主人公とメルヤに話しかけている。
『ぱぁぁぁっ……！』という感じで、途端に声が明るくなる。
『ガラテア姉さんからの話は終わったの？』という意味で聞いている】
あ～❤
お話終わったの～？」

●正面　３０センチ
「【穏やかに、嬉しそうに。
自分達亜人の少女がこのような未来を描けたのは、主人公のお陰だと思っているので。
それを、主人公に改めて伝える】
ご主人様……これが、貴方様が生み出した幸せです。
貴方様が居るから……今、皆（みな）笑顔でいられるのです。

【明るく、嬉しそうに。
これまでにないほど、明るい声で】
では、参りましょう！」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
〈ミーシャ〉
「【主人公とメルヤに話しかけている。
ガラテアと話して疲れているだろう二人をねぎらいつつ、こちらへおいでよと促す】
お疲れ～！
メルヤちゃん、ついてきてくれてありがと～！
こっちおいでよ～。ちょうどお菓子買ってきてるんだ！」

▲4　ここで、ＳＥ１０と１１が再開する。

こうして、大切な仲間たちに呼ばれる形で、主人公とメルヤは駆け寄っていく。
行きつく先にあるのは、間違いなく幸せな未来だ。
色々不安な事もあったが、今は心からそう思える。

●正面　３０センチ
「【ミーシャ達に話しかけている。
明るく、嬉しそうに。
これまでにないほど、明るく、幸せそうな声で】
皆様こんにちは……！
はい……是非、ご一緒させて下さいませ！」

主人公、手を大きく上げて振ると、メルヤと一緒に歩いて行く。
とてもあたたかな、晴れた日の事だった。

〈主人公〉
「お姉さま達、待っててくれてありがとう！
うん……ぜひ、いただこうかな！」

ここでフェードアウトして終了。